

江藤新平関係文書——書翰の部（二）——

江藤新平関係文書研究会（代表 島善高）

一九 岩村右近書翰

1 〔明治五年〕三月七日

一筆啓上仕候、時下愈御清適被成御奉職、奉敬賀候、小生ニも去月七日着縣仕候、發程時分事務差湊大御無礼申上、出立之日一寸御尋仕候處御留守ニ付、不得拝顔候、縣下之事も漸々事務緒ニ就キ、条理相立候故、余程通常之事ハ簡易ニ相成、近日長日を苦み、近々より管内巡行、合併之旧縣新旧之分別相立、其連く改革を加、五月六日迄二者一通取纏申度心得ニ而勉勵罷在候、余り先を相願候へ共、六七月比ニハ色々伺事も有之、上京仕候含ニ付、府下なれば無此上、責而府下近傍ニ相轉度、今度迄ハ色々事情も有之、壬生公御守役相勤候へ共、元来雪国寒地之苦困者真ニ暖国之景況と者意外之別種ニ御坐候、近日者追々暖氣ニ相成、梅花相開至シ、桜桃一斉

ニ不日可開氣候ニ候へ共、絶而賞花之地茂無之、時々ニ東台墨田之花を想像罷在候、比日島令縣地通行之砌、儀衛等之鄭重、真ニ諸侯初而襲封ニ不異、家来五人、僕三人、妻を合テ女五人、惣計上下十四人、唐櫃并引馬引戸駕籠夫婦二挺、其他右ニ準ス、岡泊之山形泊ニ付、纔三里之道程ニ而十字ニ着いたし候故、定而隣縣之事故、何乎御用談等有之早着之事と存居候處、何之御用談筋も無之ニ付甚怪み居候處、后後承候へ者美服等相拵候由、不堪一笑候、依而道中丈之不足次三百両ニ不下と算計仕候、余ハ後便、萬々可申上候、早々頓首

三月七日

岩村

江藤様

編者註

- ①岩村右近は、後掲二〇の岩村定高（一八二八～一八九九）と同一人物。佐賀藩の年寄、参政、家令を歴任。明治二年七月佐賀藩権大参事、同年八月開拓権判官、明治三年九月民部権大丞、明治四年八月山形県大参事、十一月同県参事、明治五年九月三重県参事、明治八年十二月三重県令、明治十七年七月元老院議員。
- ②壬生公は、山形県権令の壬生基修（一八三五～一九〇六）。
- ③島令は、秋田県権令（明治四年十二月～同五年六月）の島義勇。

2 [明治三年] 六月十九日

（巻封）「江藤新平様 岩村右近」

明廿日五字、大納言様被為召候条、溜池御屋形御出参可被成候、以上

六月十九日

（一枚一六 cm ㊦ 013-48）

編者註

- ①大納言は鍋島直正（明治二年八月十六日任大納言、明治三年八月十七日辞表聴許）。
- ②溜池御屋形は佐賀藩中屋敷（現財務省印刷局）。直正隠居後の屋敷となっていた。

3 [明治三年] 六月二十一日

（巻封）「江藤新平様 岩村右近」

明廿二日五字、大納言様被為召候条、御屋形御出参可被成候、以上

六月廿一日

4 [明治二年] 八月二十八日

（巻封）「江藤様 岩村」

奉拝賀候、然ハ小生一昨日歸着、未今日迄者不参罷在候へ共、今日共ハ一寸拝趨之含之處、雨天故失敬仕候、此品持歸候故、進呈仕候、いつれ拝顔、萬々不満、頓首

八月廿八日

（一枚一七 cm ㊦ 013-50）

編者註

- ①江藤は明治二年一月から同年八月まで佐賀に滞在していた。

5 [明治二年] 九月晦日

（巻封）「江藤新平様 岩村右近」

正四位様益御機嫌能、本月十八日 御着藩被遊候条、上々様へ明朔日、附御祝儀御帳ニ而申上候様との儀御座候、此段為御存候也、

九月晦日

（一枚一六 cm ㊦ 013-51）

編者註

- ①正四位様は、直正の長子直大（一八四六～一九二一）。明治二年七月十日、官名が廃せられたので、「中納言様」（直正）を「從二

位様」、「少将公」（直大）を「正四位様」と改称した。同月十八日、直大は東京を発して帰国の途に就いた。

6 十月二十六日

（封筒）「江藤様 岩村」

今午後第一字頃、参拾間募里御臨車奉願候、勿々再拝

十月廿六日

（裏書、異筆）

弘行

（一枚一七 cm ㊦ 013152）

編者註

①参拾間募里とは、銀座三丁目辺りにあった「三十間堀」のことか。

7 「明治二年」十二月二十九日

（巻封）「江藤様 岩村」

雑務局不捌ニ而大延引仕候

十二月廿九日

（一枚一八 cm ㊦ 013153）

編者註

①雑務局は明治二年三月制定の藩治規約で定められた部局であつて、佐賀藩の金穀の出納を掌った。

8 「明治二年」七月一日

（巻封）「江藤様 岩村」

舟行可然中野申間候間、佐賀御出浮可被下候

七月朔日

（一枚一六 cm ㊦ 013154）

編者註

①中野とは、鍋島家家扶の中野数馬（一八一八—一八八二）のことか。

9 一日

（巻封）「江藤様 岩村」

開拓使官員山口邸寄合、段々隙取、奉恐縮候、尤も一字迄ニハ是非仕舞、直ニ馬上より向島参候間、御先御出可被下候、已上
朔日

（一枚一七 cm ㊦ 013155）

編者註

①開拓使官員山口とは、権大主典の山口頭のことであろう。

二〇 岩村定高書翰

1 八月十二日

(包紙)「江藤議長様 岩村定高

平安

(巻封)「江藤様 岩村

坐右

比日ハ乍例長坐仕、御困迫被成候義と奉恐縮候、段々御發船期限も相迫、公私御多端之事と奉存候、此品乍塵抹今度持歸候故、入電覽候間、御叱止被下候半ハ忝奉存候、何れ一兩日中拝趨、余者萬縷可申陳、早々不一、以上

八月十二日

(一枚一七cm 江013156)

二一 岩村書翰

1 [明治三年] 十月十五日

(巻封)「江藤中辨様 岩村定

平復

御華墨奉拝誦候、頃日五一寸拝顔と存居候へ共、何かと取紛、殊

ニ前休日五ボードイン江眼病治療相頼、右病院江往來いたし、今日ハ一日養生之含ニて致不參、在宿仕候、明日ハ必靈巖島罷出可申、余ハ拝顔、萬々

十月十五日

二白、明日ハ成丈朝飯後早々ニ可致候

(一枚一六cm 江013157)

編者註

①ボードインBauduin, Antonius Franciscus (一八二〇～一八八五)はオランダ医。文久二年に來日し、幕末に長崎の医学校で教えたが、明治二年より大阪仮病院、大阪陸軍病院に勤務。明治三年、帰国を前にして横浜に滞在、ドイツ軍医來日までの間、大学東校で教え、同年閏十月末に帰国。

二二 上野景範外務少輔書翰

1 [明治六年] 七月二十八日

(巻封)「江藤参議殿 上野外務少輔

別添

昨日花房大丞を以委細演説為仕置候英国訴訟取調委員之義、別紙草案差上候間、凡右之意を以早々被仰渡候様仕度候、尤司法省おゐても別段異存無之候也

七月廿八日

編者註

(一枚一八cm 江013-58)

①上野景範(一八四五―一八八八)は明治前期の外交官。明治五年十一月外務少輔、明治七年九月特命全權公使として英国在勤、明治十三年二月外務大輔、明治十八年元老院議員。

②花房大丞、名は義質(一八四二―一九一七)。明治四年外務少丞、同五年外務大丞、同十三年弁理公使として朝鮮在勤。明治四十四年枢密顧問官。

関連史料

①明治六年九月五日「大隈重信宛玉乃世履書翰」(大隈重信関係文書二)一八〇頁以下)

二三 浦久平書翰

1 [明治三年] 二月七日

〔東京〕

佐賀へ

(封筒) 江藤新平殿 浦 久平

要用

封印①

一筆啓上仕候、暖和相成候處、益御安泰被成御座、恐悦奉存候、然ハ御切米請拂残銀式百六拾七両貳分式朱余、取引帳相添、現金かこ文箱入ニノ、先月廿一日も重松基吉出京便江事傳差上置候付而ハ、最早御落手可被成与奉存候条、御受取被成下候、右之段乍御面倒一筆被仰知被下候様仕度候、當節富岡耿助義、開拓方御用向ニ付被罷登ニ付而ハ、爰元大一体之振合等、尚又得与御承知可被下候、将又

御家之義、每往申上置候通、當今之形勢共ニてハ小家与相違、御大家之義ニ付賣兼、右御直段金之義ニ候處、万一梅雨後迄も打追賣捌相付兼候ハ、修覆所等出来候哉も難斗、左候へハ思様不弁利相成、不可然ニ付、元御取入直段も凡三四十金程見切、賣捌候外有御坐間敷旨、折角相良通り談合罷在候付而者、右之通りニ而追々掄明可申哉奉存候間、御含置被下度候、此段為可得貴慮、早略如斯御座候、書余期后音候、恐惶謹言

二月七日

浦 久平

江藤様

(一枚一八cm 江013-59)

編者註

①浦久平は、江藤新平の母浅子(浦氏)の縁者。佐賀の役後、江藤の遺骸を木角蓮成寺に葬った。

②重松基吉(一八二四―一八七四)は島義勇の次弟。明治七年の佐賀の役で、島義勇・副島義高の両兄弟と共に斬罪に処せられた。

③富岡耿助は佐賀藩大参事、伊万里県権大参事、山梨県権参事、名東県権令等を歴任し、明治九年熊本県権令となった富岡九郎左衛門敬明(一八二二―一九〇九)のことか。

④相良とは、維新後も佐賀にとどまって大弁務、参事、鍋島内庫所顧問などを務めた相良宗藏(一八二二―一九〇四)のことか。

二四 栄左書翰

1 二月晦日

昨晚ハ尊書被下候処、他出中遅目帰宅拝誦仕候故、御答も不申上、御無禮仕候、陳ハ御談之儀御座候而、今朝九字比御枉駕可被下候付、差支之有無御尋之趣、奉敬承候、九字半ニ者出省仕候半而不叶儀御座候ニ付、其思召ニ而少し御引上ケ御光臨被下候得者無此上奉存候、尤御差急之儀ニも無御座候^{半者}、拙生ニも何レ之道參殿之含ニ付、一兩日中參上相伺候様可仕、此段乍延引貴報、早々頓首

二月晦日

栄左

江藤明臺

(一枚一七 cm 1013160)

編者註

① 栄左は佐野栄寿左衛門常民(一八三二—一九〇二)か。

二五 江口五郎書翰

1 明治八年十一月十四日

幸便ニ付致啓上候、去ル十二日、長崎出港同十四日神戸着岸、同十五日堺縣江罷越積ニ御座候、其御地エハ来ル二十四五日比ニも相成事与奉遠察候間、其思召可被下候、いつれ上京之上萬事御咄申上義ニ御座候、左様御承知可被成下候、此段先以申上置候也

八年十一月十四日

五郎

熊太郎様

(一枚一五 cm 1013161)

編者註

① 江口五郎は江藤新平の妻の弟。

② 熊太郎は江藤新平の長男。

2 六月十九日

一筆致啓上候、霖雨之節ニ御座候処、御一統様弥御壮健可被成御座奉恐賀候、爰元ニも不相變無事罷在候間、左様御安心可被成候、然ハ梅太郎始メ引拂之砌ハ嘸々御厚配之程奉遠察候、御地出發之末海陸無滞廿七日昼爰元帰村、御地模様委細承知、偕又廿三日出之電報廿六日落手拜見、墨沢含越旁、貴所様御書中与不合致、爰元ニ而御は、様私ニも如何与存候故、墨沢江相談、先以佐賀店罷越、一駄私出佐賀前ニも候間、私忝人彼ノ地罷出相良江参り候得者過而相分り候故、貴殿ニ者爰元罷在候様申聞候処、墨沢申ニ前件相止メ候而も幸イ御當地參候故、菩参与して同伴致度旨相談有之、三十日ハ出佐賀、着懸ケ私忝人相良江罷出地道之駄ニ而参り候処、先方より金員仕出之一義被相談、近々東京店ハ受取書等参与申事也、残余米之義者追々賣捌次第仕送仕筈与申事ニ而、過与安心仕候、早速前件梅太郎其外下着之御報申上筈ニ候処、彼是取紛失念仕、御面可被下奉願上候、惣而ハ貴所様ニ者当分御帰村無之哉、私ニも堺縣并其地罷越度候得共、何と申御か、様御不快故ニ而無人之半差切り罷越候義出来不申、去迎外人江勿論之義頼者更ニ無之、甚以心痛至極ニ存

候、當分御帰村無之候ハ、近比御面倒ながら右御知せ被下度御相談
申上候、其上ながら尚勘弁も有之候故、其思召可被下候、此段御見
廻旁為可得貴意如斯ニ御座候、頓首

第六月十九日

五郎

於千代様

村吉様

(一枚一五 cm) 江 013162

編者註

①「於千代」は江口五郎の姉で江藤新平の妻。「村吉」は弟。

②相良は前出の相良宗藏のことか。

二六 江口村吉書翰

1 [明治八年] 十月二十二日

簡略申上候、別封大意御元へ送達いたし呉候様、今廿二日到来いた
し候ニ付、則郵便を以差上候間、御掌落相成度奉存候、去ル三日附
之御状廿日正ニ致落手候、四方之景情御示教、備ニ拝讀いたし候、
朝鮮之云々ハ実事ニ有之、現ニ其時ノ我死人者長崎港内梅ヶ崎ト云
所へ葬リタリ、余条ハ後便ニ譲リ候、扱足下之御病症ハ如何ニ而候
哉、御書中ニテ日夜甚タ安カラス、苦心罷在候、御養生御專一奉干
祈万椿候、早々不具

十月廿二日

江口村吉

江藤熊太郎様

追白、御母様其外様ニモ御変障モ無之ト考察罷在候、皆様へ宜ク御
傳言御頼申候

(一枚二五 cm) 江 013163

編者註

①「朝鮮之云々」は江華島事件のこと。『郵便報知新聞』明治八年
十月二日号に「我雲揚艦ハ朝鮮ノ京城ニ接近セル江華近海ニ投錨
シテ、去ル廿一日小舟ヲ以テ江華灣ヲ測量セシニ、海岸ノ砲台ヨ
リ発砲シタルニヨリ雲揚艦ハ之ニ応ジテ戦ヲ開キ、兵ヲ率ヒテ上
陸シ、其砲台ヲ乘リ取り大小砲并セテ七十挺余ヲ分捕リセリ。我
水夫ノ即死セルモノ一人アリ」と死者があつたことを報じてい
る。

②「梅ヶ崎」は長崎深堀の隣接地で墓地があるところ。

2 九月十日

拝呈、大分秋冷相催申候、昨九日福岡氏始皆々一同帰途、芳濱与敷
申宿之最寄之野邊ニ而御一統様へ御行合申、即場決儀、私事引戻し
御供仕、無異義、當温泉場御着、富士屋御止宿相成居申候、宜キ時
分之御催立ニ而御座候へハ、期日御帰京之節ハ吃度頭相立可申事与
奉存候、明十一日^(判読不能)川帰邸ニ而、皆様御安着之旨奉報玉床下
候、此段拙筆、恐惶頓首

九月十日

江口村吉

江藤先生

(一枚二六 cm) 江 013164

二七 江口美房書翰

1 [明治二年] 一月二十八日

拝啓、宜御清祥可被成御座奉恐賀候、然ハ去廿一日横濱出帆、廿五日長崎着之御報、則日郵便より申上置候得ハ、定而御承諾被下候義ニ奉存候、翌廿六日ハ同所發途、廿七日爰元到着仕候、先生ニも別而御平安ニ而何之御滞も無之、先ハ御安意可被成候、当方ニ於テハ更ニ御心遣ニ及不申候ニ付、皆様江も御安心被成候様御傳言奉希候、御轉宅ハ両国^{深カ}□川ハ不可然と熟考仕候、先ハ着之御知セ迄、早略御報仕義御座候、尚奉期後便候、頓首

一月廿八日

江口美房

志波原高兄

(一枚一六cm 江013-65)

編者註

①「志波原高兄」とは江藤新平妻「於千代」の弟江口八太夫のことか。

二八 川口屋源作書翰

1 五月八日

一書奉啓上候、暖氣日ニ増相成候處、御全家様益御機嫌能可被成御座、珍重奉拝賀候、次ニ私ニも去秋以来伊萬里縣廳之諸色御用聞相勤、御蔭ニ不相替勉強仕候居、乍憚左様御安心可被下候、附而ハ

元鹿嶋縣士松村操一ト申人、前邊之知音ニ而、同人義當節東京被指越、是非尊所様江得拝謁、御高話拝聴仕度旨、頻ニ沙汰相成、若哉同人御伺被申候ハ、御面會被下度、於私ニも伏テ奉願義ニ御座候、此段同人ハ任相談、愚書奉指上候間、是非ニ一返成共御面談被下度、幾重ニも御拙仕義御座候、早々頓首、再拝

五月八日

江藤源之進事

川口屋

源作

江藤新平様

諸色御用達		
肥前	川口屋	伊萬里

(一枚一八cm 江013-66)

編者註

①江藤源之進は新平の弟。

2 十二月一日

別紙ニ而申上候、昨三十日晚之此者さし立候積り之處、一昨廿九日ニ大阪府之御用手紙参り候故、昨三十日昼出頭仕候處、同府之十五等出仕被仰付、其上郡務掛り被申付候、左候へ者御蔭ニ月給も拾式圓ツ、頂戴仕候通ニ相成候、左様思召可被下候、何卒此節迄

之御難題御聞濟被下候様、幾重にも御抛り申上候、惣してハ其御方様ニ此者御入用ども候ハ、一先帰り候上直ニさし上申候間、如何様共思召次第可仕候、先者荒々目出度、かしく

十二月一日

源作

於千代様

尚々、新平様且又御母様へも其段御通し可被下候、かしく

(一枚一七cm 江013167)

3 五月二日

「東京靴町七丁

ヤフレ

里黒尾町

(包紙上書)

江藤新平

ヤフレ

江藤源作

要

平信封

」

(包紙裏上書)

「印

印 五月

ヤフレ

發ス

(包紙)「江藤御主人様 御宿元」

奉拜呈候、御弁當之義者追附可奉献、御烟草丈ハ只今為持差上候、扱昨夜御返事申上候節、小三様怪我被成候事ハ御承知被成下候哉、尤左程重き御事ニ而者無御座、此段草々頓首

二日

(一枚一六cm 江013168)

編者註

①「小三」とは江藤新平の三男小三郎のこと。

二九 江藤新平書翰

1 明治三年三月二十二日

當月廿一日私家来所用有之、八官町筋差遣候歸途、第壹番之御門鑑壹枚致紛失候ニ付、心当所々相尋候得共、何分見当不申奉恐入候、依之進退奉伺候、以上

午三月廿二日

江藤中辨

辨官

御中

(欄外回答)

取落候者謹慎五日可申付事

辨官之印

(一枚一八cm 江013169)

編者註

①「八官町筋」は銀座八丁目。

関連史料

①「御門鑑」については、明治三年三月、「十御門印鑑ノ事」の布告が出されている。「来十日以後、外櫻田門 和田倉 馬場先 日々谷 数寄屋橋 鍛冶橋 呉服橋 常盤橋 神田橋 一橋、右十御門、夜五ツ時メ切、無印鑑通行不相成候ニ付テハ、先般御布令相成候諸般小印出来候迄ハ、従前用來候藩印六拾枚宛、來八日迄ニ兵部省へ差出可申事」「同上、右十御門、夜五ツ時メ切後、官員判任以下其餘士庶人、無印鑑通行不相成候事」(『維新日誌卷四』(静岡県郷土研究会)。

2 明治四年二月十一日

御管内武州多摩郡阿佐ヶ谷村百姓秋元伊兵衛娘縁組送籍云々御問合之趣承知之、就而者私家来ニ御示之加藤栄次郎与申名前之者無之候、此段御答仕候也

辛未二月十一日

品川縣廳

江藤中辨

御中

(一枚一八 cm ㊦ 01370)

3 明治六年五月十二日

本月三日附貴翰ヲ以テ今般拙者義

天皇陛下ノ特命ニヨリ参議ニ被任候事御祝賀被成下、御厚誼忝存候、右御挨拶可得御意、如此御座候、以上

明治六年五月十二日

参議江藤新平

佛國代理公使

コント ド チュレンヌ閣下

(一枚二八 cm ㊦ 01371)

編者註

①コント・ド・チュレンヌの明治六年五月三日附祝賀書翰は、㊦ 01371に存在する。

4 明治六年七月二十九日

権大判事玉乃世履、當分外務省御用掛ニテ英国商人より日本政府へ對し候訴訟之證據取調候様可被仰付ニ就てハ、右取調之事務迄御達相成候てハ體裁不可然義ニ付、本人江ハ御用掛之辞令而已御渡可相成候間、取調之件ハ其長官口達ニ而可然候、尤御用相濟候ハ、其旨御上申次第可被免候、此段及御掛合候也

七月廿九日

江藤参議

上野外務少輔殿

(貼付)

御書面之趣異存無之候間、早々御沙汰相成候様致度、此段及御答候也

七月廿九日 上野外務少輔

(一枚二八 cm ㊦ 01372)

編者註

①玉乃世履(一八二五〜一八八六)、明治前期の司法官。明治四年八月司法中判事、十一月司法権大判事、明治六年七月外務省御用掛、明治七年三月「英国人民ヨリ我政府ニ対スル訴訟七件裁決ノ儀委任」、明治十一年九月大審院長。

関連史料

①明治六年七月二十九日附福岡孝弟の江藤宛書翰㊦ 0137659。「権大判事玉乃世履、當分外務省御用掛英国訴訟證據取調可被仰付ニ付、本人ハ御用掛辞令而已御渡ニ相成、取調之件ハ長官口達ニ而可然云々御達之趣致承知候、固ヨリ於當省異存無之候間、

此段御答申進候也、六年七月二十九日 司法大輔福岡孝弟、江藤参議殿」

5 正月晦日

(巻封)「副島明府 江藤新平拝

閣下

拝啓、未タ多忙中ニ而御伺も不仕、寔以御失禮、奉背本意候、志かれハ此不腆物備御覽間、御笑留被下候ハ、大慶奉存候、此旨得芳慮度、早々再拝

正月晦日

(一枚一七cm 江013-73)

6 (明治二年)二月二十一日

私儀

東京府判事兼會計官判事被 仰付置、難有奉存候、然處母親儀旧冬6大病相煩居候付、今一應致面會度旨、國許より申越候、就而者甚奉恐入候得共、日数五十日之御暇被差免被下度奉願候、右者御用多端之御半、甚以恐縮之至ニ奉存候得共、親子之情合難黙止次第ニ付、何卒願之通被 仰付被下度偏ニ奉願候、以上

二月廿一日

江藤五位

辨事御中

(欄外回答)
願之通御暇被下候事

7 四月三十日

(一枚一八cm 江013-74)

拝啓、鬱陶敷天氣ニ而御坐候處、倍御清穆之筈奉大賀候、然者弟義昨日来瀉下、夜前6四五行水瀉仕リ、今日者身體甚疲勞、今一日丈加養仕度奉存候、此段宜敷思召置可被下候、早々頓首、再拝

四月卅日

(一枚一八cm 江013-75)

8 (明治三年)四月

私儀

糀町七丁目阿部志津麿跡屋鋪拝借被 仰付置候、今般拂下ケ被仰付度奉願候、惣而者代金之儀者御規則之通相納可申奉存候、以上

四月

江藤中弁

東京府

御中

(欄外回答)

東京府印

書面家作見積直段金四百貳拾壹兩三分銀五匁ニ而御拂下ケ相成候

間、御定之通、月賦を以可相納事

但納方證文等之儀者邸宅掛江可引合事

(一枚一八 cm 江 013-76)

編者註

①江藤は明治五年正月、隣地で空地になっていた元松江県上邸千四百四十九坪余も東京府より借り受けた。

関連資料

①十一月五日の東京布達「邸宅拂下代金月不納ノ分、来ル十二日當府出納掛へ上納可致候様、比如及御達候也、十一月五日、東京府、江藤新平殿」(江 959-3)。

9 五月三日

(巻封)「御内披」

拝啓、時下倍御清穆之筈奉大賀候、然者御手透も御座候ハ、今夕御来臨被下度奉願候、尤只今ハ閑暇罷在候、此段早々頓首

第五月三日

(一枚一八 cm 江 013-77)

10 (明治二年) 十二月二十三日

寫

不存寄御菓子頂戴被

仰付難有仕合奉存候、出勤之上御禮可奉申上候得共、不取敢以名代

私儀

右御禮奉申上候、宜御執奏奉願候、已上

十二月廿三日

江藤中辨

(一枚一九 cm 江 013-78)

編者註

①明治二年十二月二十日、江藤新平は東京・溜池にて暴漢に襲われて創を受け、そのために明治天皇が二十二日に宮内省を通じ菓子折を見舞として贈った。この書翰はその礼状であろう。宮内省からの見舞状「所勞之趣被 聞食候ニ付、為御尋御菓子一折賜候旨被 仰出候、仍差進候也、十二月廿二日、宮内省、江藤中辨殿」が江 909-46に残っており、その写真が『江藤南白 上巻』四四四頁に掲載されている。

11 一日

拝啓、快雨ニ而凌克御坐候、倍御清穆被成御起居大賀候、先日者乍例御面倒罷成、程々御地走頂戴深々奉謝候、今日ハ洋学能會ニ付、冢児差出候間、尚又宜敷御倚頼仕候、鳥渡御辞参上可仕筈ニ而候處、何坎ニ而不克其儀、冢児のミ差出申候、蕃客へ謝金其外として五圓為封差上候間、是又宜敷御取計被下度、乍恐奉願候、頓而御礼まで、早略、頓首、謹言

□^(ヤブ) 月朔日

(一枚一八 cm 江 013-79)

12 (慶応四年)

一掛り役之儀ハ左之通被仰付方ニ而ハ無御坐哉

貸付方

與力 二人

同心 三人

右著市政を兼勤、且與力之儀ハ調役之内に被仰付候事

貸付方御用懸り

伊東八兵衛

右著一般與力上席、調役與力次席被仰付方ニ而可有之事

貸付方吟味役

勘定役壹人

右著元幕府之時目見以上之ものニ付而者調役與力上席ハ固り之事、左候而當局貸付運ヒ方ニ付而者眼前之処宜敷様ニして、會計運動之大体ニ付而不可なる儀有之哉も難計ニ付、貸付方懸り被仰付度

民政所

権判事試補

池田庄三郎

右著是迄督府応接方頭取ニ付、會計局権判事試補貸付方懸り被仰付度、右著當節伊勢屋八兵衛に銀納、内輪に余程之盡力有之、此後之運方も心得有之ニ付、前件之通被仰付度事

御存寄も (判差不能)

右之通急々夫々相運ヒ候様有御座度事

江藤新平

北島千太郎様

島團右衛門様

横川源蔵様

此廉五十人扶持不被下候、後來功業相見候ハ、三人扶持位者被下候而も可燃狀、誤ハ扶持方と申候得者、永世ニ相懸り候付、等閑に難被下、此事土方并懸り與力佐久間弥太吉へ可申通置御取止ニ相成候間、御達シ無之候、

其外廉々ハ無據次第ニ付御免被成候方ニ而可有之候

(一枚一八cm 71013-80)

編者註

①北島千太郎(一八四二—一八七七)、諱は秀朝、水戸藩士。慶応四年五月民政裁判所判事助勤、六月江戸鎮台府判事、十月東京府知事、明治五年和歌山県権令、明治六年和歌山県令、明治七年佐賀県令、明治九年長崎県令。

②島團右衛門は既出の島義勇。

③横川源蔵は、慶応四年七月の時点で、北島と同じく東京府の民政兼会計補助。

13 七月二十九日

(巻封)「山口市郎様 江藤新平

品物添

口上

拝啓、明朝に御發程ニ而ハ、御公私御用無々御多忙奉存候、此品到而龜抹ニ御坐候へ共、入御覽候間、御笑留被下候得者、大慶奉存候、此旨得貴慮度、早々、頓首再拝

七月廿九日

(一枚一八cm 71013-81)

編者註

①山口市郎は鍋島直正の近侍長、鍋島家家扶を勤めた山口一郎のこ
とか。

14 〔明治二年三月〕

一筆致啓上候、春暖相成候處、御全家様倍御安泰被成御坐、玆重奉
賀上候、爰許二も皆々無事罷在候間、乍憚御安慮可被下候、然者私
儀當月十五日、准國老准國老ハ當節着座を御改相成候唱号二而御座候二被仰
付、参政被仰付、最前被下置候五人御扶持御切米二被仰付被下置、
御加米之上、今又百二十一石合テ百五十石拜領被 仰付、難有仕合
奉存候、此旨御吹聴為可仕、如斯御座候、恐惶謹言

編者註

①佐賀藩政時代には三家・親類以外に、親類同格・連判・加判・著
座・准著座・物頭・士・手明鍵の七階級があつた。

(一枚一七 cm ㊦ 013-82)

三〇 榎本書翰

1 明治六年十二月二十八日

記

一金九十式圓也

但御預り金貳千三百圓口、七月より十二月迄六ヶ月分年八分利足

内

金五圓卅三錢四厘

内渡金貳百圓、九月より十二月迄、利

足引

金四圓也

内渡百五十圓、九月より十二月迄、利

足引

金貳拾六圓也

内渡千三百圓、十月より十二月迄、右

同断

金貳圓六十六錢六厘

内渡貳百圓、十一月より十二月迄、右

同断

右一金三拾八圓也

差引而

金五拾四圓也

右之通利足金仰渡申候

已上

西十二月廿八日 榎本

江藤様

(一枚一七 cm ㊦ 013-83)

2 十二月二十八日

換舌

尊墨拝見仕候、先以御勇剛奉賀上候、然ハ別帳之内より御渡金之儀
被仰付奉畏候、則利束取調金五百四圓奉差上候間、御落手可被下
候、右二而一先皆済相成候間、御突合被遊度奉存候、猶不日拝眉可
申上、御受迄如此御座候、頓首

十二月廿八日

江藤様

尊下

榎本拝

(一枚一七 cm 江 013-84)

三二 円城寺杵内書翰

1 明治六年七月十五日

向暑ノ砌ニ御座候所、益御壯勇被遊御座、恐悦至極ニ奉拝賀候、隨而僕ニ茂無事ニ相暮罷在候、乍失敬御休息可被成下、就而者先曉愚札差上候が御落手程覺束なく奉存上候、依之此節ノ書状至着仕候次第、乍御面働様何卒一紙被下置候様、偏ニ奉希候、且又乍恐愚意ヲ奉申上候、其趣意者、於國元ニ酒屋油屋其外諸商賣ノ税金存外ニ相懸り候、是尅ツ、又御上納升數元國升ニ而四斗三升ツ、入、御上ニ者四斗ニ相立候由慥ニ承り候、右ニケ條何共落付がたく、右等之義者阿なた様方之御議定ノ上御布達ニ相成候哉、よも左様ニ而者御座有間舖、是者其縣々々ニ而ノ役人之私意ヲ行イ候ハンも難計存候故、乍失敬愚意ヲ奉申上候、然し今專御改政ノ御半ニ御座候得者、税金多分ニ相懸候而も萬民帰伏仕、妙政も御座候や、乍去古語ニも權量ヲ謹メ与あれば、僕ニハ如何ニもし而民安堵の御政コトこそ偏ニ奉歎願而已、誠ニケ様之事共申上る義、恐多ク御座候得共、昔々御心安假失敬仕候段、真平御用捨ノ程偏ニ奉希上候

明治六年癸酉七月十五日

江藤新平様

二白

園城寺杵内

(一枚二五 cm 江 013-85)

先書ニ御願申上候義、何卒御取立ノ程偏ニ奉願候、早々

三二 大木喬任書翰

1 五月七日

(封筒上書)「江藤様 大木拝

急状也

(巻封)「呈上 至急」

本戸只今被罷出ニ付、則御光駕奉願候、其余者拝願上、萬々、頓首

五月廿日

大木

江藤様

(一枚二〇 cm 江 013-86)

編者註

①大木喬任(一八三二—一八九九)は佐賀藩士で、慶応四年閏四月徴士。参与・外国事務局判事、京都府判事、軍務官判事、同年九月議事体裁取調御用、十二月東京府判事、明治三年民部大輔、明

治四年民部卿、初代文部卿、教部卿などを歴任して、明治六年参議となった。

②木戸孝允（一八三三—一八七七）は長州藩士で、慶応四年正月徴士、閏四月参与、明治三年六月参議。

2 十一月十一日

（巻封）「江藤新平様 大木民平

急用

今日者件々御相談仕度御坐候ニ付、東京府へ朝五ツ時より御出仕被下度、北島ら御談じ遣シ可申筈ニ罷在候得ハ、必ス御承知と者奉存候得とも、尚僕よりも今一應御談じ仕候、則僕ニも罷出候付、先生ニも無御遅刻御出仕被下度候、此段為可得貴意、勿々頓首

十一月十一日

（一枚二〇cm 江013-87）

編者註

①北島は前出の北島千太郎（秀朝）。

3 十一月廿三日

（巻封）「江藤様 大木拝」

今日者晚七ツ時三条殿へ参殿可仕申上置候ニ付、何卒左様御承知被下度、附而者彼ノ議事之事篤ト申上置度ニ付、其前見込暇御打合セ仕度御坐候得ハ、後刻参上御支無御坐哉奉伺候、以上

十一月廿三日

（一枚二〇cm 江013-88）

4 十一月二十五日

（巻封）「江藤様 大木」

昨夜ハ御世話相成、御禮申上候、今日者何卒御出仕被下度、直クニ出仕候付、兄ニも直クニ御出仕奉願候

十一月廿五日

（一枚一六cm 江013-89）

5 十一月二十七日

（巻封）「江藤様 大木」

御紙面之趣承知仕候、實ハ少々なら只様延引候て而も不可然ニ付、萬々御願仕度御坐候条、成丈之義奉願候、尚拝面上、勿々頓首

十一月廿七日

（一枚二〇cm 江013-90）

6 十二月十七日

（巻封）「江藤新平様 大木民平

急用

」

態与御知らせ被下奉謝候、御苦勞之御義奉存候、併し御苦勞被成候
ハ、萬事規則相立、無此上義ト奉存候、萬々拜眉可申述奉存候得
共、深更ニ及ヒ失敬仕候、何れ萬緒拜顔上可申述候、頓首

十二月十七日

御頼申上度品も御坐候得共、囊中相きらし何れ其内ト奉存候

(一枚二〇cm 江 013-91)

7 十二月二十五日

(巻封)「江藤様 大木」

急用 ー

岩村被参答候と約束仕置候、以上

十一月廿五日

(一枚一八cm 江 013-92)

8 〔年月日不明〕

(巻封)「江藤様 大木」

朝方只今まで客應對、漸ク仕舞ニ付、参上可仕ト相心得候、御さ
わり無之哉御尋仕候、已上

(一枚二二cm 江 013-93)

9 四月一日

(巻封)「江藤様 大木」

先日者大形千萬奉存候、今日者参上仕度、鳥渡御城へ御用も御坐候
ニ付、只今参

朝仕候、延引者不仕候ニ付、此段申上置候、頓首

四月朔日

(一枚二〇cm 江 013-94)

10 〔年月日不明〕

(巻封)「江藤様 大木」

別紙北島其外、御懸合被下度奉願候

大木

江藤様

(一枚二〇cm 江 013-95)

11 十二月廿二日

(巻封)「江藤様 大木」

急御用 ー

昨夕者大形千萬奉存候、銀箔之一件、今朝もやまし参り候ニ付取合

候處、矢張り銅箔ニ相違ハ無之、表面ハ黃金箔ニ相違も無之、只火中ニ没すれば面目ヲ顯シ申候なれば、銅箔之製ハ間違も無之、然處東京府へ取入り候義、別ニ手段有之事ト洞察仕候、最早金も式千三四五百兩も取集メ候而ハ、不容易候得共、今日中、中島五位ニ御談合ハ御見合セ被下度、右伺篤与御談判之上、同人江御相談可然奉存候、(利談不態)□御序テニ林恕介、内田彦四郎ナル者ハ、存シ居被申候儀文ヲザットなによらす御尋問被下度、其上より工面も可有之ニ付、此段、匆々

十二月廿二日

(一枚二一 cm 013-96)

編者註

①中島五位は徳島藩士の中島錫胤(一八二九—一九〇五)。明治元年三月徴士、刑政局権判事、閏四月刑法官判事、從五位下、明治二年五月兵庫縣知事、七月中弁、從五位、明治三年九月岩鼻縣知事、明治四年十一月七尾縣權令、十二月飾磨縣權令、明治六年六月司法省五等出仕、明治七年一月長崎裁判所在勤などを歴任し、その後、各裁判所の所長などを経て明治十七年元老院議員となる。

三三 大久保一藏書翰

1 十月十八日

(巻封)「江東新平様 大久保一藏」

急

過刻ハ御嘶申上候通、今夕日暮ハ條公江參殿仕候様承知仕、先生江も其段御通申上候様与の御事候間、此ハ早々、頓首

十月十八日

(一枚二〇 cm 013-97)

編者註

①大久保一藏は、薩摩藩士の大久保利通(一八三〇—一八七八)。慶応三年十二月参与、明治二年七月參議、明治四年六月大藏卿、明治六年十一月内務卿。
②條公は既出の三条実美。

三四 大久保加賀守書翰

1 〔慶応四年〕五月十八日

昨日御面會致し候節、吉野大炊介拔擢之儀被仰聞候處、御即答之儀者御差扣被下候由、直ニ決断致し候様、為筋之儀御心配被下忝存候、不行届之者ニ候得共、御撰ニ預候段忝、則今日中都合次第可申付候、此段御報如斯候、以上

五月十八日

大久保加賀守

中井半五郎殿

三雲為一郎殿

追而勘考致し候義も有之、致延引候、以上

(一枚二〇 cm 013-98)

編者註

- ①大久保加賀守は小田原藩主の大久保忠礼（一八四一～一八九七）。
 ②吉野大炊介は小田原藩の家老。
 ③中井半五郎は鳥取藩士の中井範五郎（一八四〇～一八六八）。大総督府監軍として小田原の幕府軍を攻めるが、小田原藩兵に殺害された。
 ④三雲為一郎（一八三九～一八六八）は佐土原藩士。戊辰戦争に際して藩の豆相別隊軍監となり小田原に駐す。後、会津攻撃で戦死。

三五 大洲鉄然書翰

1 二月二十八日

拝啓

益御清祥奉拝賀候、此もの盤兼而申上候同縣讀井逸三ニ御坐候、迂論数條建言、蒙御呵責度由、生込依頼仕候、乍恐御公暇ニ一度拝謁ヲ賜ヒ候ハ、畢生之大慶ニ可奉存候、餘者言頭ニ揖申候、恐々謹言

二月二八日

江藤殿下

下執事

鉄然拝

(一枚一七cm ㊦013-99)

編者註

- ①大洲鉄然（一八三四～一九〇二）は萩藩の真宗僧侶。明治五年四月、教部省に出仕。
 ②讀井逸三は山口県端本の讀井逸三郎。
 関連資料
 ①「讀井逸三郎建言書」(㊦919-5)

2 [明治五年] 六月五日

屢奉汚尊問候ハ深ク恐入候共、至情熱中不得已敢テ啓上仕候、明蓮寺石舟端本事、樸直而有志氣、雄辨驚人ノ丈ニ乏ト雖モ、沈黙ニシテ能堪艱難候、依テ從來同心強力罷在候處、四月中旬共ニ拝命、諸宗僧侶も若干人拝命仕リ、中ニハ不堪其任モ有之、先月末被為在淘汰乍恐當然之御儀ト奉在候、然處石舟儀も他緇流同様遂ニ被免候ハ、省中之長官未タ同人之事詳細御承知無之故坎ト奉存候、或ハ真宗之徒過多之論モ有之由、然時ハ祠官之徒一人之免職ヲ不承、何故右等之論有之候哉不審奉存候、將又有実效而無私、能称朝旨候時ハ、闔省祠官並真宗之徒而已ニテモ格別之御妨者有之間敷と奉存候、或疑フ緇流ハ一人ニテモ減シ其力ヲ殺ク乎、然ル時ハ佛法御活用之御趣意共相違仕候様奉存候、且教部省之盛ニ相成候所以ハ布教之実效ニ在リ、布教ノ実效ヲ舉ントスルトキハ緇流一二名ノ多寡ハ非所可論、却而其寡ヲ可恨ト奉愚察候、同人事決テ非不堪任者、是迄同心協力仕リ今無故凡僧輩と共に被廢棄候而ハ、同人之失望ハ兎モ角モ、小生共情義ニオヒテ安然居残リ、區々盡力モ難仕次第二候ヘトモ、只今辭職仕候テハ大教院如何ト又顧慮仕候、乍恐

吾々ノ事御承知被成下候ハ獨リ

閣下アル而已、只今御掛リニテハ無之候得共、最初御立基ニ候得ハ、過日門脇大丞殿へ教院ノ儀ニ付白華ト共ニ罷出、愚論ヲ陳シ候節モ大丞殿被申候ニ、近々ノ内江藤殿ニ至リ熟議致シミルヘシトノ事承リ候、大丞殿參館之節、又黒田小輔殿其他ノ方々へ閣下御一聲被下度、進退困迫ノ餘粗暴ヲ不顧、敢テ訴衷情候、冒瀆 尊威、惶懼無已、伏テ祈海量

六月五日

鉄然頓首

司法卿從四位江藤殿下

執事

編者註

①明蓮寺は大分県中津市にある真宗寺院。

②門脇大丞は鳥取県士族の門脇重綾（一八二六～一八七二）。明治五年三月教部省四等出仕、同年四月教部大丞、八月死去。

③白華は真宗大谷派僧侶の松本白華（一八三八～一九二六）。明治五年教部省出仕、同年九月に東本願寺法嗣現如、石川舜台、成島柳北、関信三らとヨーロッパへ宗教事情視察に行き、明治六年七月帰国。

④黒田小輔は鹿児島士族の黒田清綱（一八三〇～一九一七）。明治五年五月教部少輔。

3 (明治五年) 六月十七日

(巻封)「正四位江藤殿閣下

大洲鉄然

内呈まで

謹白、過日不顧失恭、内願仕候妙蓮寺石舟、一昨十五日十等出仕拝

命仕候、同人ハ固小生迄 御寵遇拝謝無地奉存候、此上ハ一層憤力 閣下之英鑑ヲ不汚様尽力可仕候、為御禮上館、拝首、合爪

六月十七日

鉄然

誠恐頓首

正四從^{（三）}殿閣下

執事

4 (明治五年) 七月二十三日

(切紙)「上 江藤殿 鉄然 拝

下執事

口上

残炎更熾ニ御座候處、益御清健奉拝賀候、生過日火急ニ西京行、兩三日前帰京仕候、途上所得新聞帑備貴覽度拝趨仕候、御電覽奉希上候、時候御伺ひ旁登門仕候、

恐々頓首

七月廿三日

(一枚一八 cm 江 0131101)

(一枚一七 cm 江 0131101)

5 (明治五年) 十一月二十五日

謹啓、過日申上候同縣讀井逸三事、随分才鋒鋭敏之者ニテ、第一品行正直、世之頑固君子と申分ニハ無之、弱冠之者ニシテハ能々時勢ニ適スル活發驚人之論ヲ吐露シ、貴豪長老ニ遇トモ決テ阿諛曲從不仕、飽適自己之所論ヲ主張仕リ、又城府ヲ以人ニ接ル事ナク、十字街中ヲ白日過ルト云風有之候テ、尋常浮薄之書生ト同日ニ論スヘカラス、実ニ櫟中轅下之客ニ無御座候、甚御省ニハ適任之人物ト愚考仕候、元來文才モ有之、皇漢籍者勿論、洋書も可ナリニ讀ミ、既ニ少々翻譯忤致候、併シ此を以相進候分ニハ絶テ無之、讀井生も事務上之望ニテ、司法省ヲ以テ一部ノ活律書ト認メ、専ラ活地活見ヲ聞ク趣意ニシテ、所謂十年^(長カ)書ヲ讀ハ百戰陣ニ臨ノ士ニ不如ト云フ持論ニ候ヘハ、其才鋒品行トヲ以テ今一層實際上ニ臨、之ヲ磨勵為致候時、乍恐後來國家之一器物を可期候、尤も来事ハ昏上之論トハ大ニ格別ナルコト申モ癡ニ御座候得共、先暫時試補同様微官ニテ可然處へ出仕被仰付度奉懇願候、若此申上候ハ同縣者ニ私ニ仕リ候様相聞候ヘ共、四海一家モトヨリ親疎之間嫌疑を避候も、却テ公明正大之論ニ無御座候間、只唯為國家其親を不捨微意ニ御座候間、

閣下德量幸ニ賜涵容奉拝祈候也

十一月念五日

正四位司法卿江藤殿

誠惶誠惶

大洲鐵然百拝

下執事

6 二月二十一日

奉拝賀候、過日来御所勞之趣乍畏爾後拝伺も不仕、失敬之段奉恐謝候、頃日者御容躰如何被為在候哉、御保養專要奉存候、此品輕微之至ニ候邊共、御見舞之印込ニ奉呈仕候、御叱納被成下候ハ、難有奉存候

二月念一日

恐々頓類

木下 靖

大洲鐵然

江藤先生

侍史

7 四月八日

(一枚一七cm) 江013-104

(卷封)「江藤様

大洲鐵然

木下 靖

閣下

各拜」

昨賜手書折節不在不奉答多罪奉陳謝候、御病人様^(判読不能)□慥ニ拝承候、私今日東校へ参リシカト相頼置候間、何時御入院被成候而もよろしく、此段申上候、他拝面、萬申上候、草々謹白

四月八日

江公閣下

(一枚
二七
cm

江
013105
)